様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０３００

研究課題名（和文）シェイクスピア演劇における勢力均衡思想に関する考察

研究課題名（英文）A Study of the Balance-of-Power Thought in Shakespeare's Plays

研究代表者
廣田　篤彦（Hirota, Atsuhiko）

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：４０２９２７１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、シェイクスピア演劇における勢力均衡思想の表象を、16世紀から17世紀におけるこの思想の理論化と現実の国際政治における展開に即しながら、主として以下の劇に関して考察した。
(1)『リア王』における国内、国際政治における二重の勢力均衡とその破綻。特に、先行する『レア王』と、ネイハム・テイトによる王政復古期の改作との比較。(2)『ヘンリー八世』におけるウルジー枢機卿の外交政策に見られる勢力均衡。特に、主要な材源であるホリンシェッドの『年代記』における記述との比較。(3)『ハムレット』のデンマーク王国の外交政策に見られる二方面における勢力均衡。

研究成果の概要（英文）：　This study analysed representations of the balance of power in Shakespeare's plays mainly in the following three plays, with reference to the theorisation of this discipline and its development in the international politics in the 16th and 17th centuries.
1. The dual (domestic and international) balances in King Lear, especially in comparison with anonymous King Leir and Nahum Tate's adaptation of this play in the Restoration period. 2. The balance-of-power policy pursued by Cardinal Wolsey in Henry VIII, especially in comparison with the corresponding descriptions in Holinshed's Chronilces. 3. The balance-of-power policies pursued by the Kingdom of Denmark in Hamlet in two directions.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：英文学　シェイクスピア　勢力均衡

１．　研究開始当初の背景

本研究は研究代表者が科学研究費補助金などにより、継続して行っている初期近代イングランドにおける国家像、国民像の表象に関する研究の延長線上に位置付けられる。研究代表者のこれまでの研究と関連する本研究開始当初の背景としては以下の 3 点が挙げられる。

1. 歴史劇におけるフランスを始めとして、シェイクスピアを中心とする初期近代英文学におけるイングランドとヨーロッパ諸国、諸民族との関係については近年盛んに研究がおこなわれているが、これらにおいて主として探究されているのは、「英仏関係」のように、一方にイングランドを想定した二国間関係である。研究代表者も先行研究を取り入れながら、上記の通り初期近代イングランド国家像、国民像に関する研究を、とくにその不安定さに焦点を当てながら進め、イングランド国民像が周辺ケルト諸族ならびにヨーロッパ大陸諸民族との関係の中で認識され、揺らぎを見せることを指摘してきた。その成果の一つが 2010 年に公刊された ‘The Tardy-Apish Nation in a Homespun Kingdom: Sartorial Representations of Unstable English Identity’ (*Cahiers Élisabéthains,* vol.78)である。この論考を進める中で、複雑に重なり合った複数の二国間関係を基礎とする国際関係のシステムの中でこの問題を考察することの必要性が認識されるにいたった。

2. 1980 年代以降、新歴史主義を始め、シェイクスピア演劇をそれを取り巻く文脈の中で考察する研究が盛んとなる中で、J. G. A. Pocock を中心として発展してきた the Atlantic Archipelago 史研究の成果を文学研究に取り入れようとする姿勢が見られるようになった。その一つの流れが、イングランドと周辺の諸民族との関係の中で英文学を考察しようとする研究であり、初期近代英文学研究においては既に一定の成果を挙げている。研究代表者はこうした研究の大きな成果の一つである John Kerrigan, *Archipelagic English: Literature, History, and Politics 1603-1707* (Oxford: Oxford UP, 2008) を 2009 年に日本シェイクスピア協会の機関誌 *Shakespeare Studies* にて書評した。この書評を通じてグレイト・ブリテン島、アイルランド島、ならびに周辺諸島からなる the Atlantic Archipelago 内の関係が 16－17 世紀文学の理解に極めて重要であることを再確認する一方、大陸諸国や更には（キリスト教布教や植民地化を通じて）太平洋地域を巻き込んだ、より大きな国際関係の中でこの時期の文学を考察することで新たな解釈の可能性が開けることを認識するようになった。

3. 研究代表者は同じく *Shakespeare Studies* において、2007-08 年に Tom Bishop 教授（オークランド大学）と共同で特集 ‘Pacific Shakespeare’ の編者を務める機会を与えられた。この特集は日本を含む太平洋地域におけるシェイクスピア受容を考察しようとする試みであるが、帝国主義を始めとする近代の国際関係がシェイクスピア演劇の解釈に様々に影響を及ぼしている様子が示された。近代ヨーロッパの国際関係のシステムの原型の一つは 1648 年のウェストファリア条約において成文化されているが、これに到る国際関係、また、これ以後の国際関係がシェイクスピア演劇テクストの、特に 17 世紀における受容に与えた影響について考察することは、近代以降におけるシェイクスピア演劇の世界的な受容の研究の基礎となるものであるとこの企画を通じて考えるようになった。

２．研究の目的

本研究はシェイクスピア演劇においてエリザベス朝・ジェイムズ朝期の国際関係が

どのように扱われているかについて、特に勢力均衡の概念に焦点を当てて考察することにより、初期近代英文学とそれを取り巻く文脈との関係に新たな光を当てることを目的とするものである。

特に平成 20－22 年度に科学研究費補助金を得て行った、シェイクスピアの演劇テクストを中心とするエリザベス朝・ジェイムズ朝期の諸テクストに見られるイングランド人アイデンティティの不安定さについての分析を発展させ、16－17 世紀のイングランドを取り巻く国際関係のシステムとの関係においてシェイクスピア演劇を考察することで初期近代文学とイングランド国家像・国民像との関係を再構築することを目指している。

３．研究の方法

主として *King Lear* を取り上げ、以下の三方向からの考察を加えた。

1. シェイクスピアが材源としたテクストとの比較
2. 同時期に書かれたシェイクスピア演劇との比較
3. Nahum Tate による王政復古期の改作との比較。

これらの検討を通じて、シェイクスピアの *King Lear* における勢力均衡の扱い方の特質を明らかにすると共に、この劇との比較に留意しながら、特に 17 世紀に書かれた他のシェイクスピア劇における勢力均衡の表象について考察した。

４．研究成果

本研究の研究成果は、上記「研究の方法」に即して、*King Lear* を主たる研究対象としたものと、それ以外の作品を研究対象としたものに大別できるため、以下、それぞれに分けて、後述の具体的な成果との関係を示しながら記述する。

1. *King Lear* に関する研究

本研究の中心的な対象となるテクストは *King Lear* であり、この劇に描かれたリア王の国内、国外政策における二重の勢力均衡について、この劇の材源と見做されている *King Leir* ならびに王政復古期における Nahum Tate による改作との比較において検討した。

特に、リア王が政略結婚によってブリテン国内とヨーロッパ大陸において二重の勢力均衡を模索していることを明らかにし、また、この二重の勢力均衡政策の破綻が、リアのブリテン王国における内戦と王家の滅亡という重大な結果をもたらす一因となっていることを指摘することで、この劇における勢力均衡政策の重要性を明らかにした。この研究は、上記「研究の方法」の 1 と 3 に相当するものである。

King Lear においては劇の冒頭において、ゴネリルとリーガンがそれぞれオールバニー公、コーンウォール公と結婚しており、リアが前者をより好んできたこと、しかしながら、王国の分割に際しては意外なことに同等の分与が行われることが、廷臣によって語られることから、リアが、その王国内において、有力な二人の貴族と婚姻関係を結び、両者の間で勢力均衡を保つことによって自らの権力の安定を図ってきたことが示される。

一方、コーディリアの求婚者として登場するフランス王とバーガンディ公は共にヨーロッパ大陸の君主であり、最愛の末娘の結婚相手としてこれら二人が登場することは、リアの外交政策が彼らの間のバランスを基礎とするものであることが指摘できる。

この、ブリテン王国内、また、大陸との対外関係における二重の勢力均衡は、シェイクスピアによるオリジナルであり、材源となった *King Leir* においては、年長の二人

の娘たちがそれぞれコーンウォール公、カンブリア公と結婚し、末娘の婚姻相手としてヒベルニア(アイルランド)王が想定されていることと合わせて、政略結婚によるレアの対外政策がイングランドから西側に関心を払っていることとの対照は顕著である。

これら両者を比較した際、*King Leir* に描かれる関係が、エリザベス朝後期の政治的関心（特にアイルランド政策）を反映しているのに対し、*King Lear* に描かれる汎ブリテン島的な国内政策、また、アイルランドに代わる大陸諸国との外交関係は、より強くジェイムズ朝的関心を示していることを本研究を通じて論じた。

Nahum Tate の *King Lear* については、この改作がなされた王政復古期の政治的・外交現実を反映したものであることが批評家たちによって指摘されているが、シェイクスピアによる原作と比較した際にも、コーディリアが死なないことに伴う王朝の継続、また、当時のイングランドにとって現実の脅威であったルイ 14 世を思わせるフランス王の不在、コーンウォール公の長年にわたる政敵であるカンブリア公への言及など、随所でシェイクスピア劇における勢力均衡に関わる設定を変更することで、この劇が書かれた 17 世紀後半当時の現実政治との関係が指摘できることを明らかにした。

King Lear に関する一連の研究の成果として、下記雑誌論文①、学会発表①、図書①があげられる。図書①に収められた論文は学会発表①を基に、シェイクスピアの *King Lear* における勢力均衡の重要性を分析したものであり、国際的に著名なシェイクしピア研究者からなる編集委員会の査読を経て所収されたものであるため、本研究が国際的に一定の評価を得ていることを示すものとなっている。雑誌論文①は上記「研究の方法」3 にある通り、Shakespeare と Nahum Tate の *King Lear* との比較から、17 世紀前半と後半それぞれの国際関係に即して、両テクストにおける勢力均衡政策の相違を比較検討したものである。本論文もやはり国際的な編集チームによる査読を経て発表されており、国際的な評価を仰ぐことができるものとなっている。

2. *King Lear* 以外の劇作品に関する研究

上記の「研究の方法」2 に相当する、*King Lear* 以外のシェイクスピアの劇作品の分析には、下記雑誌論文②、学会発表②～⑧、図書②が該当する。これらの研究成果は大きく以下の 3 つに分類できる。

a. 学会発表②, ⑤は *Troilus and Cressida*、⑥は *Antony and Cleopatra* という、それぞれ伝説、古典の世界において、対立する 2 大勢力の戦争を描いた劇における、勢力均衡の可能性とその破綻を、特に対立の間におかれた女性登場人物に着目して論じたものである。このうち、*Troilus and Cressida* を扱った学会発表②は、これまでほとんど注目されることがなかった、トロイのプリアムス王の姉ヘシオネへの言及を基に、トロイ、ギリシャの関係を分析したものであり、図書②所収論文として出版されている。

b. 雑誌論文②と学会発表③、⑦は、16 世紀前半のヨーロッパにおける外交関係を描いた、ジェイムズ朝期にシェイクスピアがフレッチャーと共作した歴史劇である *Henry VIII* を分析の対象としている。学会発表③, ⑦はこの劇における勢力均衡政策について、この劇の主要登場人物の一人であるウルジー枢機卿の政策に焦点を当て、イングランド王ヘンリー8 世、神聖ローマ皇帝カール 5 世、フランス王フランシス 1 世の三者間の関係について考察したものである。

勢力均衡政策の理論化は、16 世紀イタリアにおける、フランチェスコ・グィッチャ

ルディーニによる人文主義歴史記述に始まると考えられるが、イングランドにおいては、シェイクスピアと同時代に、フランシス・ベーコンによって、グイッチャルディーニの思想を輸入する形で理論化が進展したと考えられている。ベーコンは、その著作の中で、16 世紀前半の上記三君主の外交関係を勢力均衡の典型例として挙げているため、本研究においては、特に、*Henry VIII* の主要な材源となったホリンシェッドの『年代記』などの記述に注目しつつ、歴史的な背景との比較において考察を進め、ウルジー枢機卿の政策、また、ハプスブルグ家のカール 5 世の政策それぞれについて、勢力均衡主義的特質を分析した。

特に、学会発表⑦においては、明星大学の住本規子教授を研究代表者とする科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般　H23～H26)、課題番号　23520333、研究課題　シェイクスピア・フォリオの書き込みにみられる読者像)の研究協力者として分析した、明星大学図書館所蔵の第一二つ折り本のへの（17 世紀にこの図書の持ち主によってなされたと想定される）書き込みと、*Henry VIII* における国際関係との関連を探った。

雑誌論文②はこの分析を進める中で着目するに至った、*Henry VIII* において、フランスとイングランドの関係が描かれる際に、フランスの流行にかぶれたイングランド人宮廷人の描写に魔術や動物への変身に関わる語彙が頻繁にみられることを出発点に、イングランド人アイデンティティの不安定さの分析を、魔術による変身と獣化というテーマと関連させながら進展させたものである。さらに、この論文では、宗教改革(Reformation)と変態(transformation)との関係を姿かたち(form)をキーワードに追及している。

c. 学会発表⑧は、*Hamlet* におけるデンマーク王国の北東方向、南西方向を対象とした外交政策が、それぞれ、ノルウェーとポーランド、イングランドとフランス、という 2 か国との三角関係に基づいていることに着目し、それぞれにおいて、デンマークの国益に配慮した勢力均衡政策がとられていることを明らかにしたものである。本発表においては、この劇に見られる、二重の三角関係に基づく勢力均衡政策は、*King Lear* を対象とした分析において指摘した国内・対外政策それぞれにおけるやはり二重の勢力均衡と比較しうるものであることをあわせて指摘している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2 件）

①<u>廣田篤彦</u> ‘The Kingdom of Lear in Tate and Shakespeare: A Reformation Reconfiguration of Archipelagic Kingdoms’. Early Modern Literary Studies, Special Issue 21 (2013) purl.org/emls（電子ジャーナル）

②<u>廣田篤彦</u>「フランスかぶれの宮廷人と宗教改革—『ヘンリー8 世』における服装の風刺とイングランド人アイデンティティ」Shakespeare News（日本シェイクスピア協会）53 (2013): 31-41.

〔学会発表〕（計　8 件）

①<u>廣田篤彦</u>　The Balance of Power in King Lear’s Kingdom
The 9th World Shakespeare Congress, 2011 年 7 月 17 日, Charles University, Prague.

②<u>廣田篤彦</u>　The Memory of Hesione: Intertextuality and Social Amnesia in *Troilus and Cressida*.
Societe Francaise Shakespeare 2012, 2012 年 3

月 21 日, INHA, Paris.

③廣田篤彦 The Balance of Power in *Henry VIII*.
The 40th Annual Meeting, the Shakespeare Association of America, 2012 年 4 月 6 日, Westin Copley Place, Boston.

⑤廣田篤彦 The Aunt of Hector: Medievcal Narrative Romances as Sources of *Troilus and Cressida*.
The 15th International Shakespeare Conference, 2012 年 8 月 8 日, The Shakespeare Institute, Stratford upon Avon.

⑥ 廣 田 篤 彦 Emasculation and Miscegenation: Shakespeare's Cleopatra and Early Modern Reconfiguration of Circe.
The 5th Congress, The European Shakespeare Research Association, 2013 年 6 月 28 日, Paul Valery University, Montpellier.

⑦廣田篤彦 『ヘンリー8 世』の'craftie emperor' —MR774 への書き込みから考える劇中の外交政策
「シェイクスピアの読者たち」, 2013 年 7 月 19 日, 明星大学.

⑧廣田篤彦 Two Triangles for Denmark: International Relations in *Hamlet*.
The 2nd Kyoto-Bristol Symposium, 2014 年 1 月 9 日, 京都大学

〔図書〕（計 2 件）
①Atsuhiko Hirota, ''The Balance of Power in King Lear's Kingdoms'. Renaissance Shakespeare, Shakespeare Renaissances: Proceedings of the Ninth World Shakespeare Congress, eds. Martin Prochazka, et al., University of Delaware Press, 2013, 60-67.

②Atsuhiko Hirota, Shakespeare et la memoire, eds. Gisele Vernet et Christophe Hausermann, Societe Francaise Shakespeare, 2013, 43-56.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者 廣田篤彦
（HIROTA ATSUHIKO）
研究者番号：40292718

(2)研究分担者
（ ）
研究者番号：

(3)連携研究者
（ ）
研究者番号：